

中近世武家菩提寺の研究 ❖ 目次

はじめに

第一部 京菩提寺と都鄙交通

武家菩提寺をめぐる仏事と政治

——祈願寺・京菩提寺・天下祈禱——

早島 大祐 11

大名家の追善仏事と禅宗寺院

山田 徹 39

三河中条氏と大陽義冲

小木英梨奈 81

第二部 中世後期武家菩提寺の展開

阿波守護細川家と国菩提寺

衣川 仁 113

近江守護佐々木六角氏と禅院・律院

大河内勇介 152

京極氏菩提寺の形成と変遷

西島 太郎 189

近世武家菩提寺の諸相

近世前期における細川家の菩提寺……………林 晃弘 225

大徳寺黄梅院にみる近世京菩提寺の成立と存立

——毛利家との関係を中心に……………谷 徹也 261

柳澤家菩提寺永慶寺の再建過程とその役割……………平出 真宣 288

前田利長菩提所の成立過程……………萩原 大輔 312

宗教・信仰から見た中世社会の転換

一四世紀の大応派五山僧のネットワークと尾張妙興寺……………小原 嘉記 343

碧潭周皎の周辺と中世仏教——嵯峨・仁和寺・高山寺——……………芳澤 元 373

東寺領山城国上久世荘における鎮守・寺庵……………高木 純一 398

伊勢国における塩業・金融と信仰……………亀山 佳代 429

第五部 武家菩提寺史料論

蓬左文庫蔵『勝定院殿集纂諸仏事』の基礎的考察……………大田壮一郎 457

地蔵院本『笠山会要誌』と寺誌編纂―附、翻刻……………坪井 剛 492

― カラー図版 ―

「蓬左文庫蔵『勝定院殿集纂諸仏事』の基礎的考察」図版……………555

「地蔵院本『笠山会要誌』と寺誌編纂―附、翻刻」図版……………558

地蔵院本『笠山会要誌』影印……………559

あとがき

執筆者紹介

中近世武家菩提寺の研究

はじめに

本書は、中世後期、および近世の武家の菩提追善のあり方から、宗教の問題とそれと関わる政治・経済・社会の諸問題について歴史的に明らかにする目的で編まれたものである。武家の菩提寺については將軍家以下が先祖追善を行っていたことはいまでもないが、本書では研究に一定の蓄積のある足利家や徳川家といった將軍家当主の追善ではなく、研究が比較的手薄である、幕府統治を支えた守護・大名以下の階層の先祖供養の分析から上記の課題に接近している。以下、掲載順に五部一六編の論文から構成される本書の概略を述べておこう。

第一部「京菩提寺と都鄙交通」では、このテーマに関する三編の論考を収めた。

早島大祐「武家菩提寺をめぐる仏事と政治」は、武家菩提寺の類型化を行った上で、祈願寺や將軍御成などをキーワードにして守護が創建した京菩提寺をめぐる宗教と政治の問題を明らかにしたものである。

山田徹「大名家の追善仏事と禪宗寺院」は、大名が創建した京菩提寺・国菩提寺に関する基本的情報を提示した概説的論考で、本書を読むための簡便な見取り図となるとともに、今後の議論の進展に備える役割を担っている。

小木英梨奈「三河中条氏と大陽義冲」は一地方国人の都鄙をまたいだ活動を禪僧との交流とからめて論じたものである。従来あまり注目されなかった禪僧の活動と、在京活動も含んだ地方国人の動向をあわせて論じるという、ありそうでなかった事例研究である。

第二部「中世後期武家菩提寺の展開」では、一四世紀から一六世紀にわたり幕政にも深く関わった、細川・六角・京極の三家の菩提寺を取り扱った論考を集めている。

南北朝動乱のなかで守護に任命されたからといって、領国一円を自動的に支配できたわけではない。国支配には様々な工夫と営為が必要だった。衣川仁「阿波守護細川家と国菩提寺」は題名の通り、阿波守護細川家が、国支配を進めるにあたり、京菩提寺と国菩提寺のつながりを活用したことを具体的に解明した論文である。そこでは阿波国平野部の南北では支配のあり方や貫徹度に濃淡があったことや、また近世には蜂須賀家の支配がその中世的な支配体制をリセットした上で進められたことなどが指摘される。阿波国国菩提寺盛衰史であるだけでなく、地域寺院宗教史から、中世と近世を考えさせる手がかりを与えてくれるものである。

大河内勇介「近江守護佐々木六角氏と禅院・律院」は六角氏の菩提寺を精査したもので、禅宗寺院にとどまらない、菩提追善のあり方が紹介される。ここではまた制度史的な守護研究では等閑視されがちな京菩提寺についても検討が加えられており、幕閣としても活躍した六角氏権力の側面を照射してくれている。

西島太郎「京極氏菩提寺の形成と変遷」は六角氏と同じく、近江国に拠点を置いた京極氏の中近世にかけての菩提寺の変遷を通覧したものである。具体的には、初代京極氏信が坂田郡に創建した京極家菩提寺清瀧寺の盛衰史を一つの柱に叙述が展開される。注目すべき論点が多く含まれるなかで、近世初頭の京極家が中世京極家との系譜関係が曖昧になるなかで、清瀧寺も含む菩提寺が整備されたこと、さらに出雲・隠岐転封後、同地に新たに菩提寺が整備されると、清瀧寺は一転して衰退に向かうことなどの重要な事実が明らかにされる。家の系譜と菩提寺の関係は、近世細川氏をとりあげた林論文でも取り上げられる論点である。

第三部「近世武家菩提寺の諸相」では、近世、特に一七世紀の細川・毛利・柳沢・前田の四家の菩提追善について取り上げた論考を収めている。

林晃弘「近世前期における細川家の菩提寺」は、近世初頭に京・江戸・国元で展開した細川家の菩提寺の実態を明らかにした論考である。京での菩提追善事業に制約が加わったことや、国元では領国統治の一端を担ったこと、そして忠利・光尚が沢庵宗彭に帰依したことから、中世では細川家の菩提追善を担っていた南禅寺派の地位が低下し、大徳寺派が中心となるなど、近世初期の菩提寺をめぐる複雑な状況が丁寧に整理されている。

谷徹也「大徳寺黄梅院にみる近世京菩提寺の成立と存立」は毛利家と大徳寺黄梅院の関わりを論じたものである。一六世紀に地方の戦国大名が大徳寺などの塔頭寺院を庇護する動きが顕著になることはよく知られているが、研究史の関心が希薄になった、その後の近世の展開が解明されている。その作業を通じて、近世大名の都鄙関係が、江戸―国元だけでなく多様な広がりをもつものであり、幕末に禁裏・京の重要性が浮上するなかで、再度意味を持つことを示唆する視野の広い論文である。

平出真宣「柳澤家菩提寺永慶寺の再建過程とその役割」は、柳澤家の国菩提寺といえる永慶寺での仏事の実態を明らかにしたものである。菩提追善機能だけではない、江戸の菩提寺だけで事足りるなかで、甲府から大和郡山へ転封後、なぜ国菩提寺もまた再建されたのかを考える手がかりを与えてくれる事例研究である。

萩原大輔「前田利長菩提所の成立過程」は、前田家三代目利常が進めた、前当主で異母兄利長の菩提追善事業の分析をもとに、前田家の国菩提寺の整備過程を追った研究であり、それを経て加賀藩国菩提寺が触頭として寺院支配の一端を担ったことが明らかにされる。武家菩提寺の近世化する過程も視野に入れた、近世国菩提寺の基礎的研究である。

衣川論文、西島論文、萩原論文などが、中世から近世への移行を論じているのに対し、第四部「宗教・信仰から見た中世社会の転換」では、その名の通り、菩提追善のあり方から、中世という時代のなかでの社会の変化を論じた論文を集めている。

南北朝期の社会変化を指摘するのは、この時代を扱った小原嘉記「一四世紀の大応派五山僧のネットワークと尾張妙興寺」と芳澤元「碧潭周皎の周辺と中世仏教」である。そこではそれぞれ寺院をめぐる人と知のネットワークが解明されているが、小原論文は一四世紀における都鄙間の人的ネットワークの更新を、芳澤論文では宗派を越えた知の交流と継承を指摘しており、両論文を通読すると、南北朝期研究において、歴史の断絶と連続の双方の観点を踏まえることの必要性を再確認させる内容となっている。

高木純一「東寺領山城国上久世荘における鎮守・寺庵」は名主沙汰人層をはじめとする村落住人たちの菩提追善について論じた研究史上、稀少性の高い論考である。同荘の宮座の存在の指摘、住人の追善形態に階層性が見られた点など今後の村落史研究の発展に資する指摘が多いが、ここでは一五世紀中葉に名主沙汰人のなかに家の菩提寺を創建するものが現れた点を、中世の家成立の問題として重視したい。

亀山佳代「伊勢国における塩業・金融と信仰」は、伊勢国の塩業と伊勢神宮などへの信仰の問題を金融などの経営の問題とも絡めつつ論じたものである。一五世紀末の明応地震を契機に、生産された塩が神供から、神仏の威光をまとわない商品へ変化したことを指摘し、この時期に起こった大きな社会変化を示唆する内容となっている。ここに収めた四編の論文には紹介した以外にも多くの重要な指摘があることはいうまでもないが、本書を手にとられた読者ならば、そもそも「変化球」的位置づけにある第四部こそが論集の味わいを広げることをご存じだろう。適度な「塩」分も含めてご味読いただきたい。

第五部「武家菩提寺史料論」としては、大田壮一郎「蓬左文庫蔵『勝定院殿集纂諸仏事』の基礎的考察」と、坪井剛「地藏院本『笠山会要誌』と寺誌編纂―附、翻刻」の二本を用意した。論題の史料をめぐる考察というだけでなく、それぞれ文書伝来論と文書様式論でもあり、古文書学の裾野を広げる一助ともなるだろう。

なお、坪井論文で翻刻される『笠山会要誌』は、学界では存在が知られていなかった西山地藏院原蔵のテキスト

であり、この史料を「発見」できたのは、『西山地藏院文書』（京都大学史料叢書6、思文閣出版、二〇一五年）刊行直前にご挨拶にかがった際の偶然からであった。今回、翻刻のみならず、史料のカラー写真まで掲載できたことは、編者として大変うれしく、掲載をご許可いただいた西山地藏院の藤田家の皆様にあらためて御礼申し上げます次第である。

以上、本書の概略を説明してきた。歴史学とは、基本的に失われた人やものを分析の対象とする学問であるが、本書はそのなかでさらに、死とその弔いに特化して、当時の人々が生きた時代の諸制度を照射した試みである。従来、付けたりに扱われてきた武家菩提寺を分析の中心に据えた点に、本書の第一の特色があると考えるが、このような分析視角の成否も含めて、大方のご批正を賜れば幸甚である。

早島大祐